

グリム童話をめぐる現象学

天 沼 春 樹

I グリム研究の現在

II 削除されたメルヒェン

III グリム研究のゆくえ

I

一九八五年から翌年にかけて、グリム兄弟の生誕二百年を祝う催しが各国で開かれ、それを機会に、様々な分野の研究書が発表され、邦訳もここに、三年にあっていついだされている。いわゆるグリム童話の再検討とでもいべき作業が、堰を切ったようにはじめられたといったらよいであろうか。そして、その主要な業績は、おもにアメリカの大学に籍をおく研究者たち、

後に詳しくふれるが、ルース・ボディックハイマーやマリア・タタール、そしてジャック・ザイプスなどである。

その一方で、一九八五年、十一月にヴェルツブルグ大学で行われた公開講座『グリム兄弟』の講演録が発表されているが、文学、歴史、言語学、法学の諸分野でのグリム兄弟の業績を検討するという連続講座の枠組での制約と、多分に祝祭的気分がはたらいで、単に生誕二百年を記念するために学識を披露したのみで、「今、何故ふたたびグリムか」という問いかけはいまひとつ伝わってこなかったというのがいつつわらざる評価である。⁽¹⁾

さきにあげたアメリカのゲルマニストたちの研究に共通するのは、グリム童話 *Kinder-und Hausmärchen* をめぐる〈神話〉の解体作業を通してのグリムの読み返しということになるだろう。この〈神話〉とは、すなわち、グリム兄弟が童話集を編纂するにあたってとっていた学問的姿勢をめぐる誤解のことである。

第一にグリム兄弟は、純粋にドイツ的文化遺産としての民話を収集しようとし、呼びかけ、実際にそうしたと公言していた。第二に、語られた言葉にできるだけの忠実に記録したと序文でもいつているように、恣意的な書き換えはないということ、すくなくとも、ヤーコプ・グリムは、そう思いこんでいたことだけは確かである。そして、グリム兄弟自身の発言も作用して、一般にはグリム兄弟が、民話は採話してドイツ国内を歩いたとか、すくなくともヘッセン州の村々の古老から話をきいたかのような誤解まで生じるにいたった。グリム兄弟が、メルヒェン集のために話の収集をはじめた一八〇六年頃は、兄弟はまだ二十一、二歳で、経済的困窮のまっただなかにあり、フィールドワークの

ために各地を歩きまわる余裕などなかった。せいぜいが、自分の勤めるカッセルの陸軍省の図書館の古い文献や資料からひろい出すか、知人にたのんで口承の民話を書き送ってもらうくらいであった。一八〇七年から、一八一〇年にかけては、もともと収集のすすんだ時期であったが、それにしても、話の出どころは限られていた。たとえば、カッセルの薬局、ヴィルト家の女性たち、母親カテリーナと娘たちドルトヒェン（後にヴィルヘルムの妻になる）、グレートヒェン、リゼツテ、マリイ・エリーザベトと、ヘッセンの名門ハッセンブルク家の若い娘たち、アマリーエ、ジャネット、マリイという具合に、中産階級か貴族の教養ある女性たちであって、決して農民や民衆の口からとはいいがたかった。しかも、彼ら（彼女）らは、ユグノーの子孫で、明らかにフランス文化の影響を受けていた。後にフィーマンニンとして語り部のおばあさんとして有名になったドロテア・フィーマンは、ツヴェーレンの仕立屋の女房で、カッセルに果物の行商に来るさいに、グリム兄弟のもとを訪れては貴重な話を残し

ていったが、彼女とてもユグノー派の子孫の出であり、フランス語もよく話した。

一八一一年には、ヤーコブ・グリムは、弟ヴィルヘルム諒解のもとに、民間文芸収集のためのアピールを行っている。広く、一般にむけて、ドイツの詩と歴史、ひいては文化の保存のための資料として「口伝えの伝承」を集める必要を訴えている。ハインツ・レレケが、その全文を『グリム兄弟のメルヒェン』Die Märchen der Brüder Grimm, 1985のなかで、引用紹介しているので、それにしたがって、要点を抜きだしてみることにする。

「1 われわれは、祖国であるドイツ全土の口伝えの伝説を集めようと考えている。ただ、その際、以下に述べるような理由で、われわれの考えが普遍的、かつひろがりをもつものであることを、誤解されないよう望んでおきたい。つまり、われわれは、ふつうの人間のあらゆる伝承と伝説を集めようとしているのである。それが悲しい内容のものであろうと、愉快なものであろうと、また、それがどの時代のものであろうと

それは問題ではない。それが、きわめて下手な散文で書かれていようと、よくまとまった韻文で書かれていようと（散文は内容豊かに提供してくれるよりも、下手の方が重要と思われる）それもかまわない。またその口伝えが、われわれの書物の物語と一致しようと、まっこうから対立しようと（それはよくあることであるが）、あるいはまた、何か別の意味を混ぜこんで述べられていようと、それも問題ではない。「中略」特に、強調しておきたいのは、乳母と子どもたちのメルヒェンと、おやすみ前のお話と紡ぎ部屋の物語を集めることである。

2 今、われわれは、それらすべてのものを、きわめて忠実に、一字一句違えずに記録したいと願っている。あらゆる種類の、一見無価値なことは、見付けるのも簡単だが、消えるのはもっと簡単なのである。人は一見無価値なものをそのまま記録するよりも、人工的な再話をとろうとするが、われわれは逆である。」
(小澤俊夫訳)⁽²⁾

この他にも、方言の修正はしないこと、文法上の誤

りもあえてたゞさずにおくこと、国、町、人の名前は正確に記録されねばならないことなどをあげている。

要するには採話者は、テクストに筆をいれてはならないということである。このアビールには、少壮学者ヤーコブ・グリムの気負いのようなものも感じられるし、また、事実、そのような実証的・学問的収集をのぞんでいたことには、まちがいはあるまい。しかし、結果として、そのとおりにはいかなかったことは、エーレンベルク初稿や、改訂によってテクストがどのように潤色されていたかと比較することによって今日、十分に検証が可能である。ハインツ・レレケは、グリム童話は、明らかに口伝えの「ほんとうの」メルヒェンと、芸術的色彩の濃い創作メルヒェンの中間に位置しているとしたうえで、生の素材に手を入れたことには、「兄弟は誠実に手をつくしたのである。」と、いささか、ひいき気味に擁護している。「二人は、精神上、彼らも共に担ったロマン派の時代と、ピーターマイヤーの時代の理想にとらわれていたのである。彼らは結局のところ、当時、踏み入ることのできた唯一の道を選ん

だのであった。」

レレケの右のようなグリム擁護には、すくなくともグリムの威光を傷つけないというような配慮が多分にはたらいっているような気がする。童話集の成立過程に新しい事実を次々に発表した彼にして、そうである。確かに、多くはヴィルヘルムの手によって、書き換えられ目鼻立ちをととのえられなかったら、グリム童話の魅力はなきに等しかったことはいなげける。しかし、兄弟が当時でも有数の学者であったことや、いくつかの「純粹」「ドイツ的」「ありのままの」といった彼らの発言が、後年に多くの誤解を残すことになる。ルース・ポディックハイマーは「グリム兄弟は基本的にドイツの民族文化を、兄弟の知り合いであるブルジョワの教養ある人びとから滲み出てきたというより、ドイツ民衆の間から湧き上がってきたものとして新たに定義しなおしたのだ。」と、事実と看板の違いを指摘している。さらに、童話集にかかげられているような序言の類は文学的自負にすぎず、ある程度までしか真実を語っていない、とにべもない。⁽³⁾

それにしても、グリム童話が、グリムというフィクターを通過したメルヒェンであることを前提にしたグリム童話研究が、現在の課題である。ドイツの民話とグリム童話は重なりあう部分の大きいふたつの集合円があるが、完全には重なりあうことはなく、したがって、フロイト派、ユング派の精神分析の素材にするにはよほど注意を要することになる。実母と継母のおきかえが行われているといった重要な変更を、ささやかな書き換えとして無視して、深層心理分析などできるわけもないのである。

また、グリム兄弟が意図したにもかかわらず、フランスや他のヨーロッパの文化圏に由来するメルヒェンも多く、グリム兄弟がそれらのメルヒェンを蒐集した時点で、その話の提供者がかれらにせめたのは、やはりひとつのバリエーションにすぎず、また、多くは、出土した土器の破片のように断片であったり、不整合なものだったりもしたわけで、グリムは、各断片をつなぎあわせて復元するようなまねもしているのである。したがって、完全なオリジナルなメルヒェンというも

のは存在せず、逆にいえば、そのひとつひとつがその時と場所のオリジナルであるということもできるのである。そこには、当然、話者、記録者の影響がかならずあらわれる。ヴェルヘルム・グリム自身も初版第一巻きの序文で、「語られるときはつねに異型でしかない。」と言っているくらいである。それでもオリジナルに近づこうとするならば、そのメルヒェンに付着している様々な語り手による装飾をこそぎ落として、メルヒェンの骨格にまでいたらなくてはなるまい。

グリム兄弟が、蒐集したメルヒェンにどのように自分たちの価値観をうえこんでいったかについては、ジャック・ザイプスがつぎのように論じている。ザイプスの主眼は、「グリム童話の成立と、それが受け入れられてきたことの要因で、グリム童話やその他の文学的おとぎ話を制度化し、おとぎ話の継続的な利用および解釈の背後に作用しつづけてきた力はなにか」という問いである。言い換えれば、グリム童話がなぜ他の類書を凌いで、現在の位置を獲得したかということである。ザイプスは、こう書いている、「彼ら（グリム兄

(弟)は、自分たちが収集した話を、ブルジョワジー(知的市民階級)の読者が期待する父権主義的・キリスト教的コードや、自然なドイツ文化という兄弟自身の理想的観念にびったりあうように、たえず繕い、アイロンをかけつづけたのだ。」と。つまり、民衆の口承伝統を受け継ぐという言葉と裏腹に、グリム兄弟が当時の社会から刷りこまれていた市民社会的価値観を意識・無意識のうちに童話のなかに注ぎ込んでいたことになる。フェミニニストたちの攻撃材料になる「女性は黙って家庭をまもっていよ。」というようなメッセージが、随所に秘められることになる。あるいは、読みとられることになる。⁽⁴⁾

むしろ、編者のグリム兄弟の心理的要因にも着目して、たとえば、彼らが崩壊した家庭が再生するお話を多く集めていたり、数人の兄弟と一人の妹が両親を離れて逆境を乗り越える、というテーマに強く惹かれていたことなどに光をあてるべきではないのかとも、指摘している。だが、なぜ、グリム童話を中心に、へおとぎ話の読みかえ、脱神話化が必要なのだろうか。ザ

イプスはいつている。我々の日常生活の随所に、へおとぎ話は浸透しているではないかと。シンデレラ・ストーリーは、あらゆる媒体を通じて再生産されている。また、物語の枠組みや、それに流れる倫理をへ制度化することによって、私たちは自身の生活を縛ったり、抑圧してはいくはないだろうか。ザイプスが、本書の末尾で述べている「昏睡状態から目覚めなくてはならないのは眠れる森の美女ではなく、むしろ、おとぎ話の読者であり創作者であるわれわれである。」という言葉が、彼の試みのめざすところを伝えているように思われる。

さて、グリム兄弟が集めたメルヒェンに、手を加えていったということは、エーレンベルク初稿との比較および、類話、ペロー童話との比較によって用意に確かめられることになった。その比較において、重要なのは、グリムが再話する段階でおこなった書き換えがなにを意味するかということである。第一に、かれらが規範としたところ、ここまでならゆるされると考えた書き換えの程度、また、変更したり削除したりの基

準を知ることによって、グリム童話全体をつらぬいて
いるモラルというものがあきらかになるはずである。
そして、それはグリム兄弟のものであると同時に、彼
らの時代に妥当とされた倫理規範でもあったのかどう
かという点もみのがしてはなるまい。

そして、第二には、グリム兄弟が童話集を編纂した
時代の精神をどのように読みとくかということである。
それは、グリム自身がつねに関心をよせていた「中世」
(かなり漠然としていたものであるが)をどのような
ものとしてとらえていたかということもみのがしては
ならないだろう。というのも、かれらは、ふたつのこ
とに失敗しているのである。一つは、純粋にドイツ的
文化遺産としてのメルヒェンを集めたつもりで、実は、
汎ヨーロッパ的ひろがりをもった民話集になっていた
ということ。もうひとつは、原形にちかづけようと公
言し、努力もしながら、かれらが保ちえたのは、メル
ヒェンの骨格の部分であり、肉づけは、たぶんヴィル
ヘルムのロマン派的文体になり、流れる血液は、明ら
かに近代のそれであったということである。そして、

グリム兄弟が意識せずにおこなっていたことの意味を
読みとくことにこそ、今、グリム童話を解体し、読み
直すことの意義があるのではないのだろうか。それは
つまり、中世から近代への解放である。そして、われ
われが、グリムを通しておこなおうとしていることこ
そ、近代からの解放にほかならないのである。

II 削除されたメルヒェン

ジャック・ザイプスは、グリム兄弟が最終的に残し
た童話集のテキストとエーレンベルク初稿から第7版
にいたるまでのテキストを比較してつぎのように結論
づけている。

「グリム兄弟は編集に際して、話を大きく変えた。
中産階級の道徳律に反するような、エロチックな要素
や性的な箇所を取り除き、キリスト教的な表現や要素
はたくさん付け加え、主人公を描く際には、彼らの時
代に支配的だった父権主義的な規範にしたがって、男
女の役割分担を強調し、また指小辞をつけたり、古風
で趣のある言い回しをしたり、気のきいた描写をした

りして、多くの話に〈家庭的〉雰囲気、すなわちピーターマイヤー風の味わいを添えたのである。」(鈴木晶⁽⁵⁾ 訳による)

こうした編集上での配慮のほかに、グリム兄弟はかなりの数のメルヒェンを、最終的に削除している。

グリム兄弟が、なんらかの理由で、『子どもと家庭の童話集』に収録しなかった作品が四八編ある。この未収録メルヒェンは、ハインツ・レレケの考証と編纂により『グリム兄弟遺稿メルヘン集』(Heinz Rölleke: Märchen aus dem Nachlass der Brüder Grimm. Bouvier Verlag, Bonn, 1989) に収録されている。グリム兄弟が、収録を見送った理由として、創作メルヒェンの要素が強いもの、断片のもの、箇条書でメモ程度のもの、類話がすでに童話集にあるもの、重要でないもの、欠陥のあるもの、というような点をレレケが解説しているわけであるが、「重要でない」「欠陥がある」という根拠には、ある意味では編者グリムの価値判断が強く現れてきはしないだろうか。

未収録に終わった作品のなかにはその理由が明確で

ないものもあり、いくつかの疑問が提出されてきている。九州大学の杉浦実氏は『グリム兄弟遺稿メルヘン集』のなかの『アイゼンヒュトル王』を指して、どうしてこの作品が削除されたか理解に苦しむと指摘している。氏によれば、この話のモチーフのなかにボツカチオの『十日物語』やバジールの『五日物語』に似た類話があるぐらいの理由しか思いあたらないという。⁽⁶⁾ 『アイゼンヒュトル王』のメルヒェンは、確かに眼鼻立ちの整った作品ではある。主人公は王妃であり、舞台もっぱら宮廷のなかである。その意味では、民衆のメルヒェンとはいいがたいが、まずは、そのストーリーを眺めてみることにする。

昔、ある王に三人の美しい姫がいた。なかでも末っ子のマリアーネがいちばん美しかった。ところで、隣の屋敷には、アイゼンヒュトルという、好色な王が住んでいて、まえまえからマリアーネ姫に眼をつけていた。娘の父親である王も、それに気づき、注意をおこたらなかった。

しかし、あるとき戦争が起こり、王は出陣せねばならなくなった。そこで、王は娘たちを呼び、それぞれにキジバトと紅玉とマンネロウの木を与えて言った。

この贈り物を大事に守り、わたしが帰還したときに見せなさい。このふたつのものが、今とおなじ状態であれば、操を失ったものとみなす、と。そして、屋敷のまえに壁を築き、王の留守中、姫たちが食事をするときには、窓からカゴを上げ下げして給仕するようにといいつけて、出発した。

これを知った隣のアイゼンヒュトル王は、老婆に身をやつして、カゴのなかに忍びこみ、飢えと寒さで死にそうだと、哀れみをこうて上にあげてもらおうとした。上のふたりの姫は、マリアーネ姫の忠告を聞かず、老婆を上にあげて食堂に隠しておいた。さて、夕食のあとで、三人がランプに興じていると、アイゼンヒュトル王が正体を現し、カードで負けた者が自分と寝床をともしなければならぬ、という要求をつきつけた。負けたのは、果たして末のマリアーネ姫だったが、彼女はベッドのなかに糞壺をしこんで、アイゼン

ヒュトル王をなかに落とすという計略を成功させて、王を追い払ってしまふ。アイゼンヒュトル王は復讐を誓って退散していく。

アイゼンヒュトル王は、魔術師を呼んで、上のふたりの姫を妊娠させ、妊娠中に彼の持ち物を欲しがるように魔法をかけさせた。姉たちは、アイゼンヒュトル王の屋敷内のリンゴを食べたいといいだした。マリアーネ姫は、こっそりしのびこむが、みつかつてしまふ。あやうく、クギの出た樽のなかにつめこまれそうになるが、ここでも、王をだまして、当のアイゼンヒュトルを押しこんでしまふ。全身傷だらけにされたアイゼンヒュトル王は、また復讐の誓いをたてる。マリアーネ姫は、医者に化けて、アイゼンヒュトル王をたずね、傷口に酢と塩をすりこんだ牛皮をはりつけ、王の傷はさらに痛む。まただまされたと知った王は、マリアーネ姫を二度殺すと誓いをたてた。

その後、姉たちの希望で、料理とワインをアイゼンヒュトル王の屋敷にとりにいくが、そのたびに、王の鼻をあかして、激昂させる。

やがて、上のふたりの姫が子どもを産んだ。キジバトが死に、紅玉が輝きをなくし、マンネンロウが枯れてしまう。マリアーネ姫は、子どもはアイゼンヒュトル王が育てるべきだとして、こっそりと王のもとにおくりつけて、さらに王の怒りを募らせる。

しばらくして、姫たちの王が戦から戻ってきて、三つの品の変化を見て、すべてを悟り、隣のアイゼンヒュトル王に会いにでかけ、アイゼンヒュトルとマリアーネ姫の婚礼をまとめて帰ってくる。アイゼンヒュトル王は、マリアーネ姫に復讐しようとして、結婚を申し出たのだった。それとは知らない父王は、マリアーネ姫に結婚を命じ、姫も覚悟をきめた。婚礼の祝いが終わるや、アイゼンヒュトル王は剣をひきぬいてマリアーネ姫を殺そうとするが、マリアーネ姫は三日だけ猶予を乞うて赦される。姫は自分そっくりの人形をつくらせ、そのなかに牛の血を満たして、それをベッドのなかに寝かせておいた。三日目の夜、アイゼンヒュトル王は約束どおり寝室で眠っている姫を剣で突き刺した。血が流れて、殺したと思ひ込んだ彼は、正気に

もどり、マリアーネ姫を殺してしまったことを後悔しはじめた。ほんとうは、マリアーネ姫をとっても愛していたことに気づいたのである。大声で泣きはじめた王のまえに、あらかじめベッドの陰に隠れていたマリアーネ姫が姿を現し、王が刺したのは人形であり、自分のことを赦してほしい、自分も王を愛しているのだと告白して、すべてがめでたくおさまることになった。

かなり紆余曲折を経た求愛物語であるが、三人の姉妹のうち父親の禁止を破った上のふたりの娘は、罰として妊娠させられ、父親の戒めに忠実であろうとし、なお、みずから運命をきりひらいて行動していった三番目の姫が、めでたく幸福を勝ちとるといふ教訓がふくまれている。さらには、悪としてのアイゼンヒュトル王が、最後に人形の花嫁を殺すことによって、善にめざめて、その持っていた性格が転換してしまう。これは、『蛙の王様』のみにくいカエルが、最後に魔法を解かれて王子のすがた、真に結婚相手にふさわしいものにもどるといふパターンとたいして変わらない。

グリム兄弟が、このメルヒエンを敬遠した理由は、第一にあまりに男女のセクシュアルな部分、妊娠、処女性の喪失、初夜の床での殺害といったものが修正不可能なまでに重要な構成要素としてかかわっているからではないだろうか。これは寓意どころではなく、そのものずばりの話である。すでに、指摘があるように、ヴィルヘルム・グリムは、『ラプンツェル』にみられるような、「おなかが大きくなって服がきつい」というような妊娠を暗示させるような表現でさえ極力手直しをしたくらいであるから、たとえ魔術によってであろうと、上のふたりの姫が同時に妊娠させられるといったストーリーはとうてい容認できるものではなかったはずである。

もうひとつは、行動するマリアーネ姫の性格である。グリム童話に登場する女性像は、家庭的で、信心深く、貞淑で、そして、おおむね受動的で、それらの美德ゆえに最後に救いの手をさしのべられるのがつねである。このマリアーネ姫のようにわざわざ敵の屋敷に出掛けている、アイゼンヒュトル王をこらしめるという行

動的な女性は、極めてめずらしい部類に属している。逆にいえば、現代のフェミニニストからは大いに歓迎されそうなキャラクターであるということである。性的要素と能動的な女性、このふたつがグリム兄弟をこのメルヒエンを収録するうえでためらわせた最大の要素ではなかったかと思われる。

マリア・タタールはこれに関連して、能動的な女性像を否定しているかのような傾向を「男の好奇心が自由闊達ないきいきとした力としてほめ讃えられるのにならして、女の好奇心は死に値いするものとして厳しく非難される。」(『グリム童話・その隠されたメッセージ』)と指摘している。つまり女性はある禁止を忠実に守っているべきもので、ひとたび禁止をやぶる誘惑に負けてしまったとき、そこにまっけているのは、殺人鬼「青ひげ」であり、マリア様の罰となる。もっとも、この傾向はグリムだけではなく、その源流を遡れば、その種の考え方の伝統はすでに『千一夜物語』の、シャーリヤル王とシェヘラザートのあいだに存在しているのであると、タタールは書いている。

グリム兄弟はその初版においては、童話集の学問的
性格を強調し、豊富に注釈をも付して出版したわけ
であるけれども、第二版以後は明らかに『子どもと家庭
の童話集』の名前を文字どおり意識した編集方針を強
めていった。それゆえに、彼らが子どもと家庭とい
彼らが描くブルジョワ的、ピーターマイヤー的イメ
ジにそぐわないと考えるメルヒェンは、極力避けたの
ではあるまいか。初版にあって、その後削除された
『子どもが殺しごっこをした話』、つまり実話をもとに
したと思われる、遊びのなかで実際に仲間の子どもを
豚のかわりにと殺してしまった短い話は、初版に対す
る批判も上げるかたちで、子どもたちに読ませるには
有害であるという判断が働いたものだろう。つまり残
酷さの抑制。

しかし、おもにヴィルヘルムの手によってであるが、
残酷さを抑制しようという意図は、性的な表現や暗示
をうすめようという意図ほどには強くなかったのはま
ちがいないだろう。のちには、ヘグリム童話の残酷性
については数々問題にされることはあっても、ヘグリ

ム童話のエロティシズムについては、ほとんど問題
にされていないという事実が歴然と語っている。その
おかげで、心理学者や精神分析学者は、あからさまで
ないあらゆる事物から、性的においと象徴をかぎとろ
うとやっきになってきたのである。

III

グリム兄弟の童話編集は、それ自身にどのような意
味があったのであろうか。ドイツ的メルヒェン、ドイ
ツの文化遺産を保存するという彼らが意図したことが
かならずしもうまくいかなかったからといって、それ
でもって彼ら業績をおとしめる理由にはならない。ま
た。幾多の改作、加筆、変更ゆえの非難もあまり意味
のないことではあるまいか。それよりも、グリム兄弟
が童話集を編集する行為のなかで、意識・無意識にお
こなってきたことの意味を、さぐり、その精神的諸
傾向を読み解くべきではないのだろうか。そのひとつ
のモデルとして、金成陽一氏『赤ずきん』の比較研究
があげられる。ヨーロッパにいくつもの類話があるこ

の『赤ずきん』のメルヒェンのうち、フランスのペロ
 ー、ドイツ・ロマン派の作家ルートヴィヒ・ティーク、
 そしてグリム兄弟によって再話された三つの『赤ずき
 ん』の比較において、ひとつの方向をしめしているよ
 うに思われる。

シャルル・ペロー(一六二八—一七〇三)は、一六
 九七年に『赤ずきん』LE PETIT CHAPERON
 ROUGEを書いている。赤ずきんは老婆さんといっし
 ゃに狼にのみこまれ、話はそこで終わる。最後に「や
 さしい狼には注意」という長ったらしい教訓がついて
 いる。狼が赤ずきんに着物を脱いでベッドにはいるよ
 うにうながすという多分に性的ほめかしもふくんで
 いた。

ルートヴィヒ・ティーク(一七七三—一八五三)が
 一八〇〇年に発表した『赤ずきん』(原題『小さい赤ず
 きんの生と死』Leben und Tod des kleinen Rotkäpp-
 chens)は、牧歌的なメルヒェンドラマにしたてられ
 ていた。主人公の女の子は赤い色が大好きで、「見苦
 しくないように、黒い服を着なさい。ダンスに行くこと

きみたいに赤い帽子なんて、かぶってはいけません」
 という老婆さんの警告も無視して、「赤にまさる色は
 ないわ」と言いはなつ。そして、おきまりの狼に食べ
 られてしまう。ペロー童話と異なるのは、はじめて狩
 人が登場して、赤ずきんとお婆さんを食べてしまった
 狼を撃ち殺している。しかし、食べられたふたりは、
 生き返ることはない。

グリム童話にいたって、はじめて赤ずきんは狼の腹
 から救出され、そして、みずから手で石をひろいあ
 つめて狼の腹につめこんで復讐する。金成陽一氏は、
 この赤ずきんの解放を、ペローからグリムにいたる百
 年の時代精神の変化の象徴のようにもみえるとして、
 精神史とかさねあわせている。すなわち、死をもって
 終わる教訓的ペロー童話の精神構造が、以前中世的な
 名残りをとどめるものとしたうえで、こういつている。
 「彼等の生きた時代には、邪悪な狼のイメージが確
 立していたのであった。そして、一度それに捕えられ
 たら最後であり、そこから復活してくるなどは考え
 られぬことだったにちがいない。当時の人々にとって、

それは、ベストにかかった人間が再び生き返ってくるのにも等しいことだったろう。ペローからグリムへのこの約百年間こそは、ヨーロッパ近代化のめざましい幕開けの時代であった。その意味で『赤ずきん』を復活させたのが誰であれ、それは非常に象徴的な出来事といわなければならぬ。つまり、中世という暗い時代の狼に呑み込まれていた赤ずきん(人々)が、時が熟した後、再び近代という土壌に解放されたことを物語っているからである。⁽⁹⁾」

グリム兄弟の『赤ずきん』の、ペローやテイクにない後半部、つまり眠っている狼の腹をはさみで切り開いて、のみこまれた者を救出し、かわりに石をつめこんで、狼を殺すくだりは、『狼と七匹の小山羊』のそれとほとんどいっしょである。ヴィルヘルム・グリムは、『赤ずきん』の救出の場面にこのくだりをつなぎあわせたのかもしれない。すくなくとも、別のメルヒエンのなかにもみられる断片や部分を利用して再構成するほうが、勝手に創作してしまうよりも、グリムの流儀にかなっていたはずである。かくて、禁止をおかした

ばかりに死をもって罰せられた教訓話から、不幸な境遇を克服して、あるべき状態をとりもどすというグリムが好んで採用したメルヒエンの型が生まれたることになる。再生、復活の物語は、グリム童話のなかの二百ある話のなかで、とりわけ異彩を放ち、今日グリムの童話の代表的作品として一般に親しまれているのも事実である。『白雪姫』『いばら姫』『灰かぶり』『ヘンゼルとグレーテル』『ラプンツェル』というような話には、グリムが、メルヒエン再話の範とした、ランゲの記録による『ねずの木』型メルヒエン、すなわち、冷酷な母親(継母に変更されたが)や魔女をたおして、あるべき秩序をとりもどすタイプにはいるといえる。このタイプのメルヒエンは『子どもと家庭の童話集』として、グリム兄弟が好ましいと考えただけでなく、読者も、広い意味でもグリム兄弟以後の時代が好ましいとしたメルヒエンでもあるのである。ジャック・ザイプスのいう、キリスト教的コード、ピーターマイヤー的世界観と合致しているという指摘をまつまでもなく、その近代が好んだ二元的ストーリーは、ドイツ

ニーのアニメーションにいたるまで、幾度となく再生産されてきたわけである。そして、一面では硬直化、固定化して、メルヒエンがもつ生き生きした活力を、荒々しく、粗暴とさえみえるような根源的エネルギーを失って、現代人の意識のなかで制度化されてきてはいないだろうか、というのが、最近のグリム研究の共通な認識である。おそらく、グリム童話研究にアクチュアリティをみいだしている研究者たちの視点は、こここそあるように思われる。以上のように、ハインツ・レレケの考証的研究の成果をきっかけに、最近公刊されたグリム研究の傾向と、あたらしく結びはじめたグリムのイメージを概観してきたのであるが、この後、どのような「読み」が可能であるかは、まだ予想がつかない。ただ、私見としてひとつ言えるのは、グリム以後、この世紀の終わりにいたる時代の流れが、またあらたなグリムの「読み」を要請しているのではないかということである。つまり、グリム童話という座標を、われわれが進んできた現代という座標と照らしあわせて、そこに現れてくる数次曲線(決して直線

ではない)を見ることである。その曲線上に現れる様々な「グリムをめぐる現象」ともいうべき、パロディ、カリカチュア、挿絵、さらにはグリム研究そのものも、その「読み」の対象である。このように論じてくると、このグリム兄弟の『子ども家庭の童話集』そのものが、われわれの姿を映しだすあの白雪姫の母親の鏡にも似ている。

マルチン・ヴァルザーが、アカデミズムを皮肉った『プロフェッサー・リート』を作って、

書物よ、壁の書物よ、

国中でいちばん賢いのは誰?⁽¹⁰⁾

と、歌っているのが思い出される。

すくなくとも、

へ鏡よ、鏡、国中でいちばんグリム童話を正しく解釈しているのはだれ?」

と、いう問いかける誘惑に負けぬようにするほかはあるまい。

(1) Die Brüder Grimm: Eine Würzburger Ringvor-

- lesung zum jubilaum im Rahmen den Studium generale, herg. Anneliese Kuchinke-Bach, 1987, Frankfurt a. M.
- (2) Heinz Rölleke: Die Märchen der Brüder Grimm, 1985, München. 日本語引用は岩波書店版、小澤俊夫訳を使用。
- (3) Ruth B. Bottheimer: GRIMMS/BAD GIRLS AND BOLD BOYS, 1987, by Yale University. 日本語引用は鈴木晶他訳、『悪い少女と勇敢な少年』(紀伊国屋書店、一九九〇年)を使用。
- (4) Jack Zipes: The Brother Grimm—from enchanted forests to the modern world 1988, New York. 日本語引用は鈴木晶訳『グリム兄弟』魔法の森から現代の世界へ(筑摩書房刊、一九九一年)
- (5) 同右書、二七、八頁。
- (6) 杉浦実、『アイゼンヒュトル王』日本グリム協会紀要「グリム研究」一九九一年十一月号所載。

- (7) Maria Tatar: The hard fact of the Grimms' Fairy Tales, 1987, Princeton New York. S. 168.
- (8) 金成陽一、『誰が「赤ずきん」を解放したか』大和書房、一九八九年刊。
- (9) 金成陽一、同右書、一〇四頁。
- (10) Walsert, Martin: Professor-Liedchen, in) Grimms Märchen-modern (1979, Reclam, Stuttgart. S. 45.
- 〈付記〉本稿は、『グリム童話をめぐる現象学』の序文である。最近のグリム童話研究の読書案内であると同時に、グリム研究の今後の方向を展望して、こうという意図で書かれたものである。以後、グリム童話に関するもうひとつ現象であるパロディ、カリカチュア、イラストレーション、その他の社会事象を分析していく予定である。

(一橋大学講師)